

6 小中連携を見据えた効果的な手立てと指導の実際

(1) 概要

本校総合部会では、学習指導要領で挙げられている「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力」の育成のために、児童生徒が探究的な見方・考え方を働かせ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学びや、児童生徒の興味・関心等に基づく学びを行うなど創意工夫を生かした教育活動の充実を図ることが求められている。これを受けて本部会では、自ら設定した課題を探究する学びを通して、未来を切り拓き、よりよい生き方を探究する児童生徒の育成のために小中連携の方策を考え、実践を行っている。

そこで、令和3年度から総合的な学習の時間において、児童生徒が各教科等の学びにおいて身に付けた資質・能力を生かして、自己理解の推進やアイデンティティの確立、将来のキャリアを展望する基盤の形成を目標としている。児童生徒はそれぞれの得意分野や興味・関心をもつ領域を基に探究課題を設定し、探究的な学びに取り組んでいる。小中9年間で育成を目指す資質・能力を設定し、それが総合的な学習の時間で培われ、発揮できるような具体的な指導方法について研究を深めるとともに、総合的な学習の時間の中に探究的な時間を設定するなど小中連携の方策を考えてきた。

本校で定めた総合的な学習の時間、特に探究的な学びの目標に基づき、本校及び本部会では、小中連携の視点により、『社会で生きて働く資質・能力』の育成を実現するために、いくつか柱を設定し、その中の1つとして、各教科等で身に付けた資質・能力を横断的・総合的に発揮させる手立ての工夫について研究及び実践を進めてきた。

本年度は、昨年度の課題を基に、中学校同様に岡本尚也著『課題研究メソッド』を参考にして、「ラーニングマップ」(図1)を作成し、学習過程と同時に、各活動場面で活用できる資質・能力を可視化し、児童が意識できるようにした。実際に運用するにあたって工夫した点として、職員で実際に、各学年で身に付けられると考えられる資質・能力を書き出したことで、指導の見通しをもつことができた。それにより、各学年の目指す姿を見据え、教科横断的な接続の視点からも指導を行うことができると考える。作成した「ラーニングマップ」においては、各教科等で学んだ資質・能力を基に、集めた情報を整理してまとめる活動を進めたり、他者に伝えたりする協働的な活動を通して、加除修正し、いつでも確認したりできるように児童個人で作成したり、学級で共有したことを掲示したりして活用した。

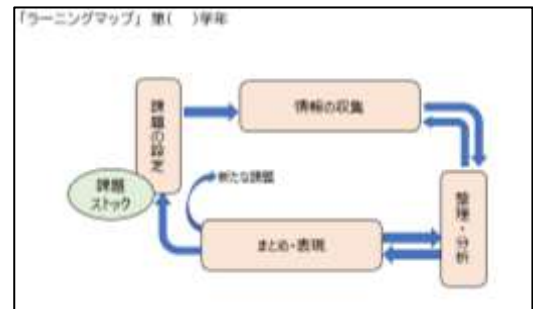


図1 「ラーニングマップ」

(2) 指導の実際

総合的な時間において、各学年における教科の学びと「鯨っ子学習」等で培われる資質・能力のつながりを明確にするために、各学年の教科等の指導計画を基に、各教科等におけるどのような資質・能力が活用できるのかを、ラーニングマップに示すことにした。まず、学年でどのような資質・能力が考えられるかについて、到達目標としての「内容」及び「資質・能力」を確認した。その後、各学年「鯨っ子学習」(第1・2学年は生活科)を中心に、各クラスそれぞれでラーニングマップの作成に取り組んだ。

① 作成の目的

教師：各学年における教科の学びと「鯨っ子学習」等で培われる資質・能力のつながりを明確にするために、各学年の教科等の指導計画を基に、「ラーニングマップ」を作成する。

児童：「鯨っ子学習」を中心に総合的な学習の時間に活用できる(活用できそうな)各教科等の学びを意識できるように整理して、それぞれの場面で想起して学びを関連付けられるようにする。

② 作成手順

- ア 学年、または学年グループで到達目標としての「内容」及び「資質・能力」を確認する（図2）。
- イ 各教科等の学習と総合的な学習の時間をつなげる。
- ウ 各学年における「ラーニングマップ」を作成し、実践する。
- エ 実践を通して、加除修正を行う（図3）。



図2 学年での「内容」及び「資質・能力」の確認

表1 令和4年度の「ラーニングマップ」に係る活動計画

	主な活動	主な内容
4 5	①各教科等の内容及び資質・能力の確認 ② ①を基に各教科等と総合の接続	・内容を整理→資質・能力の確認
6 7	③各学年における「ラーニングマップ」の作成 ④「ラーニングマップ」を基にした実践と加除修正（全学年（※1・2年生は生活科）で実施）	・年間指導計画で確認 →「ラーニングマップ」の作成・系統の確認 ・各教科等と総合の相互を意識した授業実践
9 10 11 12 1 2	○研究発表会及び児童発表（5・6年児童） ○実地調査（4年生） ④実践のまとめと「ラーニングマップ」の加除修正 ○次年度へ向けての見通し	・実践をしながら、適宜加除修正を行う。

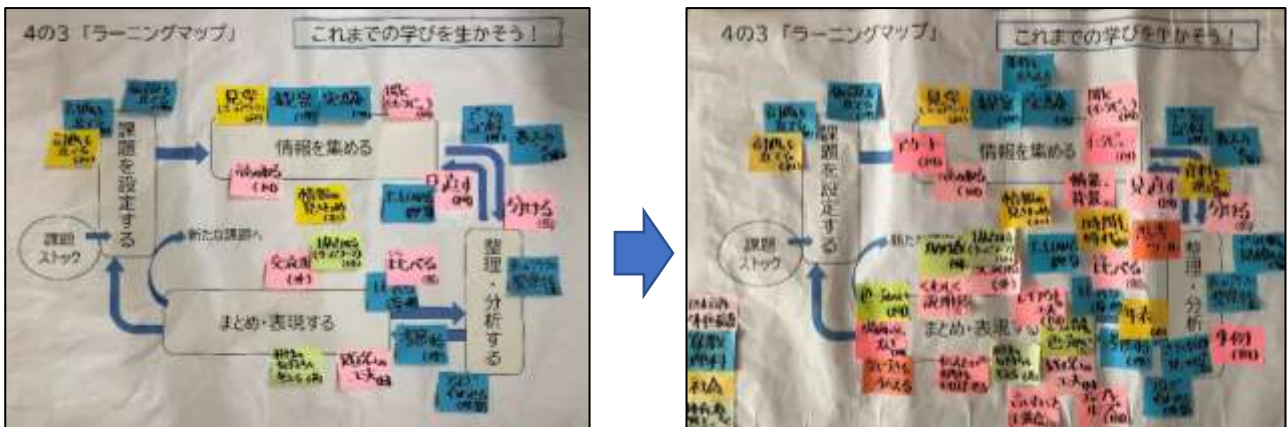


図3 実際に作成した第4学年の「ラーニングマップ」の変容（6月（左）と12月（右））

(3) 成果と今後の展望

・成果

- 全学年において、教師は教科横断的な視点をもって教科等の指導に取り組むことができた。児童も教科等の学びと「鯨っ子学習」をつなげて考えることができた。
- 教師は「鯨っ子学習」のそれぞれの場面で、視点をもって児童の活動や内容について指導を行うことができた。
- 児童は、上学年の研究発表を聞いたり、ラーニングマップを俯瞰的に捉えたりすることで、次の「鯨っ子学習」の見通しをもつことができた。

・今後の展望

今後は、「ラーニングマップ」を児童の主体的な学びと関連させて、どのように活用できるのかについて方策を探り、児童一人一人のマップを作成・活用できるように、共通理解を図る必要がある。その際、各学年の実態や活用状況等を踏まえ、「ラーニングマップ」の在り方について考察する予定である。